

Syntactical Ambiguity について (1)

— 英語曖昧表現の諸相 III —

中野 清治

(平成5年10月5日受理)

要 旨

英語の文章の曖昧さは語・句・文のレベルで生じるが、本稿では文のレベルにおける曖昧さを、次の三つの面から考察してみた。(1)英文の構造自体に複数の分析が可能な多義構文、(2)文中に前置詞句があってそれが文中の複数の要素を修飾する可能性のある文、(3)疑問文か感嘆文かが曖昧な文を含め、多様な働きを示す疑問詞。これら統語的に異なった分析を許す文は、当然、異なった意味、すなわち曖昧さを生ずる。

キーワード

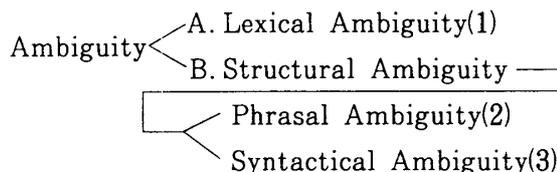
曖昧(性)、多義構文、文型、前置詞付加、修飾、疑問詞、統語構造

1 はじめに

前2回にわたり、英語の曖昧表現を、(1)語彙の多義性に基づくもの、(2)句の構造の多様性に基づくもの、に分けて概観してきたが、今回から、便宜上 Syntactical Ambiguity と題して、文のレベルでの多義性を検討してみたいと思う。

Syntactical Ambiguity も、上記(2)と同様、文構造上の多様な分析が可能であることから生じる。簡単な例は、前置詞句が文中のどの語を修飾しているかによって解釈が異なってくることに見られる。さらに、同じ語句が文中で異なった文法機能を果たすことによつて全く別の二つの文型を生み出すことにも見られる。こうした現象をできるだけ多面的に取り上げてみたい。

前稿の分類に従えば、



本稿は(3)の分野を扱う。

2 多義構文 (Amphibology)

Amphibology について「研究社英語学辞典」(sv. Dilogy)は、「故意に語句の意義が曖昧になるようないい方をする事。例えば

'I have said that the gentleman is a liar— it is true—and I am sorry for it' は「私はあの紳士は嘘つきだといった——本当にそうだった——すまないと思う」の意にもとれ、また「私はあの紳士は嘘つきだといった——が本当に嘘つきである——遺憾な事だと思う」

の意にもとれる」と説明している。「成美堂現代言語学辞典」(sv. Amphibology)は「日常の言語生活において、ことば遊びのため、あるいは弁解をあらかじめ用意しておくため、故意に語句の意味が曖昧になるような言い方をすること」と定義づけている。定義の中の「故意に」という条件をはずせば、これは‘Lexical Ambiguity’, ‘Phrasal Ambiguity’, ‘Syntactical Ambiguity’の区別をしない包括的な Ambiguity と変わるところがないので、本節では必ずしも故意に曖昧さをねらったものではないが、一つの文が二通りの統語構造に分析できるような文をこの範疇に入れることにした。従って Amphibology の訳語としては前記の辞典はそれぞれ「曖昧語法」「両義表現」としているが、本節では語・句レベルとは区別する意味において、「研究社新英和大辞典」の「多義構文」(あるいは、両義構文)を充てることにした。

2. 1 SVA vs. SVC

(1) Kim looked hard.

- (a) キムは目をこらして見た。
(Kim looked intently.) [hard=Adv.]
(b) キムは性格が厳しいように見えた。
(Kim appeared to be hard.)
[hard=Adj.]

2. 2 SVA vs. SVO

(2) Job cursed the day he was born.

- (a) ヨブは生まれた日に呪いの言葉を言った。
(b) ヨブは生まれた日を呪った。

上の英文を実際に言うときには、cursed の後の Juncture に微妙な差があることはあるが、それを無視すれば、同じ一つの音形に二つの異なった意味が対応している多義構文である。

2. 3 SVC vs. SVO

(3) They were admiring peasants.

- (a) 彼らは田舎ものたちで、感心していた。
(The peasants were awestruck with admiration.)
(b) 彼らは田舎者たちに感心していた。
(They expressed admiration for the peasants.)

(a)の admiring は自動詞 admire から派生した形容詞である。

2. 4 SVO vs. SVOO

(4) Ross gave the dog some water, and Nadia gave the cat food.

- (a) ロスは犬に水を与え、ナディアは猫用の餌を与えた。
(b) ロスは犬に水を与え、ナディアは猫に餌を与えた。

(5) They only gave the general hints on good housekeeping.

- (a) They only gave the non-specific hints on good housekeeping, not the detailed hints.
(b) They only gave the general of the army hints on good housekeeping.

2. 5 SVO vs. SVOC

(6) We saw her duck.

- (a) 彼女のあひるを見た。
(b) 彼女が頭をひょいと下げるのを見た。

(7) The doctor saw the old Indian dance.

- (a) 博士は昔のインディアンの踊りを見た。
(b) 博士は老いたインディアンが踊るのを見た。

(8) Please make her dress fast!

- (a) 彼女の服を早く仕立てて下さい。
(b) 彼女に早く服を着させて下さい。

(9) A : Are you fond of tongue, sir?

B : I was always fond of tongue, madam, and I like it still.

A : 舌肉(お話)は好きでいらして?

B : (a) いつだってそうでしたよ, 奥様, 今も好きです。

(b) いつだってそうでしたよ, 奥様, 静かなのが好きなんです。

(10) A : When did the lobster blush?

B : When it saw the salad dressing.

A : 海老はいつ顔をあからめたか?

B : (a) サラダドレッシングを見たとき。

(b) サラダが服をきているところを見たとき。

(9)は Pun を利用したジョークで, 質問者の夫人に黙っていて欲しいと思っていることを暗にほめかしている。(10)は Pun を利用した Riddle である。

2. 6 SVOO

(11) I was not feeding her dog biscuits.

(a) 私は彼女に犬用のビスケットを与えていたのではありません。

(b) 私は彼女の犬にビスケットをあたえていたのではありません。

2. 7 SVOO vs. SVOC

(12) They called Susan a waitress.

(a) 彼らはスーザンにウェイトレスを呼んでやった。

(They called a waitress to the table for Susan.)

(b) 彼らはスーザンをウェイトレスと呼んだ。

(They called Susan a waitress even though her title was hostess.)

(13) A : Didn't your husband die and leave you a widow?

B : I wouldn't know what to do with a widow if I had one.

A : (a)ご主人は亡くなって, あなたに未亡人を残されませんでしたか。

(b)ご主人が亡くなって, あなたは未亡人になったのではありませんか。

B : もし未亡人がいたら, 私どうしたらいいかわかりませんわ。

2. 8 SVOO vs. SVOA

(14) A : So John is dead. Did he leave his wife much?

B : Oh, nearly every night.

A : (a)ジョンは死んだのか。奥さんに(遺産を)沢山残していったかい。

(b)ジョンは死んだのか。しょっちゅう家を空けていたのかい。

B : ああ, ほとんど毎晩だよ。

(15) Can you spare me a few minutes?

(a) 二, 三分さいてくださいませんか。

(b) 二, 三分失礼しても[座をはずしても]いいですか。

2. 9 SVOC

2.9.1 SVO~ing

(16) John saw a dog walking toward the post office.

(a) ジョンは犬が郵便局の方へ歩いているのを見た。

(b) ジョンは郵便局の方へ歩いているとき, 犬を見かけた。

(17) We met him leaving the room.

(a) We met him as he was leaving the room.

(b) When we were leaving the room, we met him.

(16b)では walking しているのは John であり, 二つの Main Clause を結合してできた Supplementive Clause と解釈される。このように, 文末の現在文詞は Supplementive Clause になることが可能で, たとえその前に comma がなくても, 現在分詞の意味上の主語は文の主語と同一であると解する

ことができる(Hirst: 145f)。(17)も leaving の意味上の主語が he なのか we なのか曖昧である。

(18) The manager caught the boy smoking a cigar.

(a) The manager caught the boy in the act of smoking a cigar.

(b) The manager caught the boy who was smoking a cigar (but the boy smoking a pipe escaped).

(c) The manager, smoking a cigar, caught the boy.

Hirst (146) によれば, Quirk et al (1972) は三つの読みが可能だとしているそうだが, Hirst 自身の個人言語 (idiolect) では, (18) の smoking の前に comma を入れても (c) の読みは不可能で, Hirst が質問した数人のインフォーマントも大抵は戸惑うばかりだったという。

ここで(18)の文と表面上では酷似しているが, その深層構造においてまったく異なっている使役・作為動詞を用いた文との違いについて, 中島 (上: 40) の所説をふまえて触れておきたい。

(19) (a) I caught the boy smoking a cigar.
[V NP S]

(the boy who was smoking a cigar / the boy in the act of smoking a cigar)

(b) The boy started the ball rolling.
[V NP PP]

(a)の caught は感覚動詞と同様, 補語を必ずしも必要としない。〈-ing形〉は補語のように見えるが, 実には目的語の記述をしているにすぎない。それに対し, (b)のような使役・作為動作は初めから補語を要求する。後者の場合 [VP→V NP PP] となり V と PP は強い因果関係で結びついている。それは動詞が否定されればその補語 (PP) も否定されてしまうことから分かる。「転がし」始めるこ

とに失敗したということは, ボールが転がらなかったことを意味する (He failed to start the ball rolling.)。それに対して (a) の構造 [VP→V NP S] では, 目的語 [NP S] の S が基本文型の PP の位置に引き上げられたものと説明できる。というのは smoking a cigar は動詞の補語ではなく, [NP S] の S から来ているからである。(a) を否定した文 'I failed to catch the boy smoking a cigar' においては, つかまえることに失敗したことが少年の喫煙をやめさせることになった, というふうには読めない。

(20) Standing in a dusty corner, he noticed a valuable antique table with piles of papers on it.

(a) 彼は書類が山と積まれた, 高価な時代もののテーブルが埃っぽい片隅に立っているのに気づいた。[SVOC, Standing... は前置された C]

(b) 埃っぽい片隅に立っていて, 彼は書類が山と積まれた高価な時代もののテーブルを見つけた。[SVO]

上記の英文はふつう (b) の意味に解されるので, 読者に誤解を与えないように (a) の意味に取ってもらいたいのであれば次のように, itself や it を分詞句内におくことによって, ほこりっぽい片隅に立っていたのは主語の he ではないことを明確に示すことができる。

Cf. Standing itself in a dusty corner, he noticed...

Standing in a dusty corner with piles of papers on it, he noticed...

2.9.2 SVO~en

(21) He left the bathroom unwashed.

(a) バスルームをきれいにしないで出ていった。[SVOC]

(b) からだを洗わずにバスルームから出ていった。[SVO]

(22) They had the picture painted by

Manguson.

(a) Mに依頼して絵を描いてもらった。

[SVOC]

(b) Mの描いた絵をもっていた。[SVO]

(23) Have the crystals dissolved. / (?)

(a) 結晶を溶かしなさい。[(S)VOC]

(b) 結晶は溶けたか。[SV]

次の例は SVOC の文型には入らないが、

過去分詞が出たついでに Amphibology の例として挙げておく。Stolen は(a)では過去完了の〈～en〉として、(b)では名詞を修飾する形容詞として用いられている。

(24) He had stolen jewels with him.

(a) 彼はその男とぐるで宝石を盗んでいた。

[He≠him]

(b) 彼は盗品の宝石を所持していた。

[He=him]

3 前置詞句付加 (PP Attachment)

PPをめぐる曖昧性はPPが先行のどの名詞あるいは動詞を修飾するか(付加されるか)の曖昧性に起因するものがほとんどである。

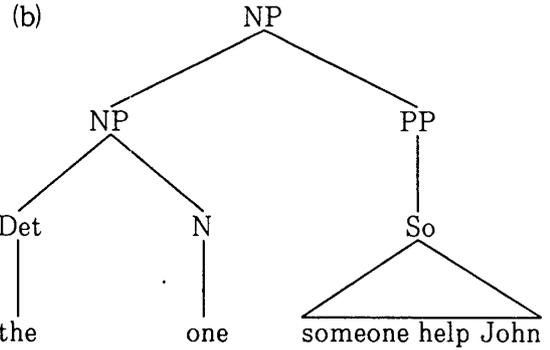
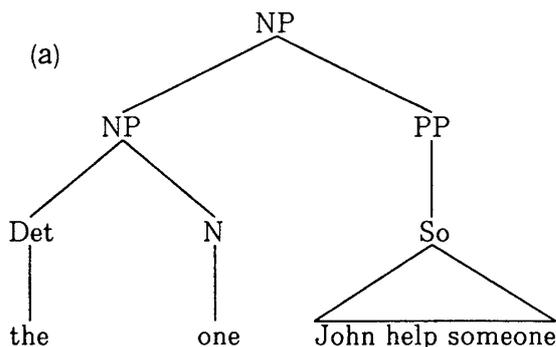
3.1 N PP

(25)のPPは不定詞句であるが、[NP→NP PP]のPPがSoの場合と考えて本節に含めた。NPが不定詞に対して意味上の主語になるかあるいは目的語になるかによって両義が生じる例である(中島, 上: 119ff)。

(25) John is the one to help today.

(a) John is the one to give help today.

(b) John is the one to be helped today.



3.2 N N PP

(26) The door near the stairs with the "Members Only" sign had tempted Nadia from the moment she first entered the club.

(a) [with the "Members Only" sign] → the door.

(b) [with the "Members Only" sign] → the stairs.

PPが先行の二つのNのうち、どのNを修飾しているかが曖昧である。

このPPの代わりに関係詞節が用いられる場合も同様に曖昧さが生じる。

Cf. The door near the stairs that had the "Members Only" sign had tempted Nadia from the moment she first entered the club.

3.3 N PP PP

(27) Bring the parcel on the seat with the damaged corner.

(a) 椅子の上にある角がつぶれた小包みを持ってきてくれ。

(b) 角がこわれた椅子の上にある小包みを持ってきてくれ。

上記の形式は後のPPが何を修飾しているかに関して潜在的に曖昧さがあって、これを避けることはむずかしい。しかし、文脈による別の解釈があれば別だが、PPは直前の名詞を修飾していると解釈する傾向が強いようである(Blake: 43f.)。

3. 4 V A PP

- (28) He seemed nice to her.
 (a) He seemed to act nicely towards her.
 (彼は彼女に対して親切のように思われた)[to her→nice]
 (b) He seemed to her to be nice.
 (彼は彼女には、親切な男に思われた)
 [to her→seemed]

3. 5 V PP

- (29) She fell down in the water.
 (a) 彼女は水の中に落ちた。[Movement]
 (*Into the water, she fell down.)
 (b) 彼女は水の中で倒れた。[Location]
 (In the water, she fell down.)
 (a)は場所の移動をあらわす副詞表現だが、音調に切れ目をおいて文頭に置くことはできない。(b)は移動を表しているものではない。
 (30) Ross was told what to do by the river.
 (a) 川がRに何をすべきかを告げた。
 [by=Agent]
 (b) Rは川のそばで何をすべきかを告げられた。[by=Locality]

文脈を無視すれば、読み手の側に統語的読みの偏向があると(a)の解釈になり、意味論的読みの偏向があると(b)の解釈になるであろう(Hirst:10)。

3. 6 V V PP

- (31) He told me to go without hesitation.
 (a) Without hesitation, he told me to go.
 (b) He told me that I should go without hesitation.
 (32) A : Will you stop drinking for me?
 B : Who said I was drinking for you?
 A : (a)あたしのためにお酒をやめて下さ

らない? [for me→stop]

(b)あたしのために飲むのはやめて下さらない? [for me→drinking]

B : おまえのために飲んでるなんて誰が言ったかね。

3. 7 V PP V

- (33) The lady you met now and then came to visit us.
 (a) 君が時どき会っている婦人が訪ねて来ました。
 (b) 君が出会った婦人が時どき訪ねて来ました。

‘Now and then’は厳密に言えばPPではないが、これはほとんど‘at times’と同じ意味・機能を果たしているので、一つの項目として設けて見た。このような形式の文の曖昧さは、話し言葉では音調や休止によって、書き言葉では comma の挿入によって、解消され得るであろう。

3. 8 V N PP

この形式の文の読みは大別して二通りの曖昧性に分ける事ができる。一つは [VP→V NP] と分析すべきか それとも [VP→V NP PP] と分析すべきかという問題であり、このPPをめぐって様々な問題が提起されている。他の一つは PP が主語指向かそれとも目的語指向かという問題である。まず後者の例から検討する。

- (34) I saw John in the garden.
 (a) 私は庭にいる時 J の姿を見た。
 [Subject oriented]
 (b) 私は庭にいる J の姿を見た。
 [Object oriented]

この両義性は否定文に書き換えても変わらない。

- (35) The policeman ran after the fleeing suspect with blood all over him.
 (a) 警官は逃げていく容疑者を血だるまに

なって追いかけた。

- (b) 警官は、血だるまになって逃げていく
容疑者を追いかけた。

次の例も二様に解釈できるであろう。

- (36) The police car chased the car at
full speed.

次の例では PP は主語にも目的語にも関
わってはいず、むしろ話手の気持ちを表して
いるものと思われる。これは語用論で扱うべ
き事項であろう。

- (37) You may borrow this copy with
pleasure.

以下、3.8の文構造について初めに指摘し
た点もふくめて問題を検討してみたい。

- (38) John attacked the man with a knife.

- (a) John attacked the man who had
a knife.[VP→V NP]

[受動態: The man with a knife was
attacked by John.]

- (b) John used a knife in his attack on
the man.[VP→V NP PP]

[受動態: The man was attacked by
John with a knife.]

- (39) The landlord painted all the walls
with cracks.

- (a) 家主はひび割れした壁全部にペンキを
塗った。

- (b) 家主は全部の壁にびしゃりびしゃりと
殴りつけるようにペンキを塗った。

上の二つの例のような場合、統語的読みの
偏向は、PP は目的語の NP ではなく、文の
VP を修飾するという読みを取られやすい傾
向がある(Hirst : 9)。

さらに、目的語の NP が definite であるか
indefinite であるかが、その後続く PP の
付加傾向に影響を与えるようである。次例(a)
のPPはNP (the dogs) を修飾しているとい
う解釈に傾きやすいが、dogs を不定にする
ことにより、(b)のようにPPはVPを修飾し
ているという読みに変えられてしまう(Hirst :

171 fn.)。

- (40) (a) The women discussed[the dogs
on the beach].

- (b) The women discussed [dogs] on
the beach.

ほとんど無限ともいえる類似構造の文を誤
解もなく読んでいけるのは、文脈の助けがあ
ることに加えて、それぞれの動詞がいわゆる
'case preference' を有しており、そのため
に Attachment Ambiguity の問題はふつう
は起こらないからである。

- (41) (a) The women discussed the dogs
on the beach.

- (b) The women kept the dogs on
the beach.

(a)の discuss が予期する項は [Agent dis-
cuss Patient] であるから、the dogs が最
終予期項 (Final Expected Argument) だ
と解釈されるので、この後に語句がつづく場
合、NP の閉止は延期され、後続の PP はこ
の NP に吸収される、つまり 'the dogs on
the beach' が一つの NP と理解されるので
ある。それに対し、(b)の方は [Agent keep
Patient State] と解釈され、the dogs は最
終予期項ではないので NP としては直ちに
閉止され、State を表す表現が後につづくこ
とを予想して読むことになる(Hirst : 155)。

本項で検討している文構造のもう一つの問
題は、PP が Attributive か Predicative か
という点である。

- (42) I want the music box on the table.

この文の曖昧性は次のような文脈の中で用
いられていれば生じないであろう。

- (a) "You can have the music box that's
in the closet or the one that's on the
table," said Ross. "I want the music
box on the table," said Nadia.

[=I want the music box that's on the
table. PP=Attributive ; SVO]

- (b) "I put the music box on the mantel-

piece. Is that okay?" asked Ross. "No," said Nadia, "I want the music box on the table."

[=I want the music box to be on the table. PP=Predicative; SVOA]

(43) Are the children at home safe?

(a) 故郷の子供たちは息災か。

[Attributive]

(b) 子供たちは無事で家にいるか。

[Predicative]

(43)は疑問文であるがゆえの両義であって、平叙文ではこのような曖昧さは生じない。

英語の常套表現である "stare a person in the face/catch a person by the arm/pat a person on the back" 等も現在考慮中の[V N PP]の形式に入るが、これを受動態にすると曖昧さが生じることがある。

(44) The rabbi who addressed the congregation was hit on the temple.

(a) 会衆に説教をしたラビはこめかみを撃たれた。

(b) 会衆に説教をしたラビは寺院で銃撃された。

3.9 V PP PP

(45) They talked about the disaster on the train.

(a) 彼らは列車を襲った惨事について話し合った。

(b) 彼らは汽車の中でその惨事について話し合った。

3.10 V N PP PP

(46) Put the block in the box on the table.

(a) 箱の中の積み木をテーブルの上に置きなさい。

(b) その積み木をテーブルの上の箱の中に入れなさい。

上記の場合は、動詞も競合して初めの方の

PPも多義性をおびてくるので、3.3(27)で扱ったものとは一応区別しておく。

4 疑問文, 疑問詞 (Interrogatives)

疑問詞が用いられた文は、疑問文か感嘆文か、疑問代名詞のばあい移動変形の前のNPの位置はどこか、疑問副詞の場合主文にかかるのか補文にかかるのか、といった問題を含むので曖昧性を生じることになる。

4.1 How

(47) I know how tall he is.

(a) 彼の背丈を知っている。[補文は疑問文]

(b) 彼がどんなに背が高いか知っている。

[補文は感嘆文]

(48) I don't know how tall he is/I have no idea how tall he is.

(a) 彼の背丈を知らない。

* (b) 彼はなんて背が高いかをわたしは知らない。

(47)を否定した文(48)は一義的であって、補文は疑問文の意味にしかならない。そのことはI don't knowをI have no ideaとした場合も同じである。ところが、後者を過去表現にすると(49)のように両様に解することができる。

(49) I had no idea how tall he was.

(a) 彼の背丈を知らなかった。

(b) 彼がどんなに背が高いかを知らなかった。

太田(652)の説明を援用すると次のようになる。Iを主語とした現在時制の半叙実述語(know/remember/realize)の否定文、およびI forgetは〈that-節〉を補文にとると矛盾したことを言っていることになる。〈That-節〉の意味内容は真であるという前提を否定することになるからである。(b)の読みは'He is very tall'という前提を有するので、(48b)は埋めこまれた感嘆文の前提を否定することになり、'I don't know that he is very

tall' とおなじく矛盾したことを言っていることになる。

(50) I asked how old George was, and was surprised by the answer.

(a) ジョージの歳をたずねて、その答えに驚いた。

(b) 老ジョージはどうしているか尋ねて、その答えに驚いた。

(51) I don't know how good meat tastes.

(a) 肉というものがどれほど良い味がするか知らない。

(b) 上等の肉はどのような味がするか知らない。

4. 2 When

(52) When did you arrange to check the stock?

(a) 在庫検査はいつすることに決めたの。

(b) 在庫検査をすることをいつ決めたの。

(53) When did he say he would come?

(a) 彼はいつ来ると言ったかい。

[come に強勢]

(b) 彼が来ると言ったのはいつかい。

[say に強勢]

4. 3 What

(54) They weren't sure what time would do.

(a) They weren't sure what time would be convenient for them.

(b) They weren't sure what would happen as time passed.

4. 4 Who

(55) Who do you want to choose?

(a) 誰に選んでもらいたいのか。

[*(a) Who do you wanna choose?]

(b) だれを選びたいのか。

[(b) Who do you wanna choose?]

<a> You want who to choose.

 You want to choose who.

<a,b> は Wh- 疑問形成変形が適用される前の who の位置をよく示している。これによって、(a)では want to の縮約形 wanna を用いることは不可であることが分かる。疑問詞 who と代名詞との照応関係については第一稿で扱った。

4. 5 Why

(56) Why not paint our house green?

(a) Why don't we paint our house green? =Let's paint our house green.
(我が家をみどり色に塗ろうよ)

(b) Why shouldn't we paint our house green? =There is no reason why we shouldn't paint our house green.

(我が家をみどり色にぬってはいけない理由はないじゃないか)

(a)の方は 'Why not ...?' という固定した表現形式に、提案・勧誘といった間接的発話行為が結びついている。(b)の方は、たとえば相手が 'We shouldn't paint our house green' と言ったのに対して(56)のように応答したもので、相手が言ったことの原因をただす質問としての読みである。

本稿の主題からそれるが、発話行為が出たついでに、曖昧さは語用論レベルでも生じる例を挙げておく。

(57) Can you open the door?

(a) [(not moving) Yes I can.]

(b) ['Sure,' says the person requested and goes to the door to open it.]

(c) [No problem (indicating there is nothing to prohibit the action).]

上記の疑問文は(a)聞き手の能力をたずねている質問ともとれるし、(b)ドアを開けてほしくて依頼している発話であるともとれるし、また(c)ドアを開けることに何か支障があるかどうかたずねているともとれる。そのため聞き手は(a)(b)(c)のような行為もしくは発話に

移るかもしれない。一つの発話は同時に幾つもの Illocutions を持つことができるので、その時の状況や適切性条件 (Felicity conditions) を見定めて聞き手は適切な対応をすることになる (Hurford & Heasley : 250-258)。上の(a)(c)のように発話文の文法形式及び語彙を文字どおりに読むことにより直接的に示される illocution を Direct illocution (Locutionary act) と呼び、発話がもつ機能を重視する(b)のような illocution を Indirect illocution (Illocutionary act) と呼ぶ。

(58) Will you not take off your coat?

(a) 上着を脱がないようにしてあげませんか。

(Will you please not take off your coat?)

(b) 上着を脱いだらいかがですか。

(Won't you take off your coat?)

依頼を表す will you/won't you, can you/can't you は丁寧さに違いはあるが、意味は同じである。ただし、(58b)の意味の定着度はなお調査が必要である旨指摘されている(太田:656)。

(つづく)

引用文献・補注

Blake, N.F. *Traditional English Grammar and Beyond*. Macmillan, 1988.

Close, R.A. *English as a Foreign Language: Its Constant Grammatical Problems*. (3rd ed.) George Allen & Unwin, 1981.

Copeland, J. & F.(ed.) *10,000 Jokes, Toasts & Stories*. Doubleday & Company, Inc., 1965.

Hirst, G. *Semantic Interpretation and the Resolution of Ambiguity*. Cambridge U.P., 1987.

Huddleston, R. *English Grammar: an Outline*. Cambridge U.P., 1988.

Hurford, J.R. & Heasley, B. *Semantics: a coursebook*. Cambridge U.P., 1983.

Jespersen, O. *A Modern English Grammar on Historical Principles*, (Pts. II & V). George Allen & Unwin, 1954.

Kess, J. & Nishimitsu, Y. *Linguistic Ambiguity in Natural Language: English and Japanese*. くろしお出版, 1989.

Lewis, M. *The English Verb: An exploration of Structure and Meaning*. Language teaching publications, 1986.

Marquez, E.J. & Bowen J.D. *English Usage*. Newbury House Publishers, 1983.

Meiers, M. & Knapp, J. *5600 Jokes for All Occasions*. Avenel Books, 1980.

Perkins, M.R. *Modal Expressions in English*. Francis Pinter, 1983.

Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G. & Svartvik, J. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. [CGEL] Longman, 1985.

Yule, G. *The Study of Language*. Cambridge U.P., 1985.

安藤 貞雄「英語教師の文法研究」(正・続)大修館書店, 1983, 1985,

石橋幸太郎編「現代英語学辞典」成美堂, 1973.

梅田巖・藤井健夫・石井丈夫・北和明・竹村憲一「英語学の視界」昭和堂, 1984.

太田 朗「否定の意味」大修館書店, 1980.

大塚高信・中島文雄監修「新英語学辞典」研究社, 1982.

- 郡司 利男「英和笑辞典」研究社, 1961.
- 田桐大澄編「英語正用法辞典」研究社, 1970.
- 田中茂範編「基本動詞の意味論：コアとプロトタイプ」三友社出版, 1987.
- 田中春美編「現代言語学辞典」成美堂, 1988.
- 中島 文雄「英語の構造」(上・下) 岩波書店, 1980.
- 村木正武・斎藤興雄「意味論」(現代の英文法第2巻) 研究社, 1978.
- 安井 稔「意味論」大修館書店, 1983.

On Syntactical Ambiguity in English (1)

— Varieties of Ambiguity of English Expressions III —

Kiyoharu NAKANO

(Received October 5, 1993)

ABSTRACT

Structural ambiguity in English occurs both on phrasal and sentential levels. This paper examines ambiguity in the latter case.

What is dealt with in this paper is (1) Amphibology where a sentence is parsed in two different ways, allowing different interpretations; (2) PP Attachment where it is ambiguous whether the prepositional phrase is attached to one element of the sentence or another; (3) those sentences that include a *wh*-word which is ambiguous as to its grammatical function and meaning.

In all three cases ambiguity is syntactical.

KEY WORDS

Ambiguity, Amphibology, PP Attachment, Modification, Interrogatives, Syntactical structure